



俳諧

續故人五百題

下



古人續五石題 秋之部 目錄

附候の部

名月	初丁	月見	二	名月西	一	月	三
名月	三	三日月	二	待宵	三	十六夜	四
后姑月	四	龍田姫	五	文月	五	葉月	五
葉月	五	名月秋	五	七夕	六	五琴	六
銀河	六	かきくぼの橋	六	願ひの糸	六	干葉盆	七
名月	七	高灯籠	七	名月	七	おろり火	七
名月	八	袷經	八	蓮飯	八	墓詣	九
生月魂	九	盆の月	九	おぼろ	九	西瓜	九
名月	十	残暑	十	さきまう	十	種風	十
名月	十一	あめき置	十一	捨らう	十一	初あし	十一

霧	十二	霧	十三	後の救入	十三	二百十日	十三
種妻	十二	野分	十四	早稲	十四	落穂	十四
木綿丸	十五	田刈	十五	晩稲	十五	司召	十五
逆峯入	十五	後徳家	十五	夕の潮	十五	八朔	十六
弱知久	十六	あま年	十六	放生會	十六	かゝり	十六
鳴子	十七	引板	十七	落し水	十七	洪鮎	十七
差鮎	十七	ちん鮎	十七	崩糸	十八	鮎	十八
河麻	十八	沙真	十八	井市	十八	斬とは	十八
袴衣	十九	漸寒く	十九	朝を	十九	夜妻	二十
あゝ酒	二十	多耐五	二十	秋の西	廿一	穰空	廿一
秋の霜	廿一	長き物	廿一	移り暮	廿二		

植物の部

材	廿二	葡萄	廿二	梨	廿三	善たそと	廿二
一葉	廿三	柳散	廿三	草の花	廿四	女郎花	廿四
木槿	廿四	葛の葉	廿四	鼠尾草	廿五	菘とうほ	廿五
蔓珠沙華	廿五	男さす	廿五	あさかほ	廿五	まき谷	廿六
殊海棠	廿六	我木瓜	廿六	萩	廿六	萩	廿七
善高麦花	廿七	稲のよな	廿七	番椒	廿七	糸瓜	廿八
あゝ谷	廿八	苺の実	廿八	蘭	廿八	くせん	廿八
菘野	廿九	桔梗	廿九	薔	廿九	紫花	廿九
あゝきく	三十	あゝきき	三十	雞頭	三十	蓼の谷	三十
稻	三十	薦穂	三十	尾花	三十	茶	三十
未枯	三十一	かゝる瓜	三十一	苺	三十一	梅りん	三十一
ゆゑ	三十二	芋	三十二	河川菜	三十二	刈萱	三十二

曆うり	十一	炬火焼	十一	吹草系	十二	神楽	十二
里神楽	十二	餅うり	十二	芭蕉忌	十二	佛名	十二
大師講	十二	寒念佛	十二				
植物の部							
木の葉	十三	落葉	十二	こがくし	十四	冬木立	十四
枯菊	十五	散りこも	十五	帰系	十五	枇杷の花	十五
山若草	十六	ハツ子	十六	冬至梅	十六	冬椿	十六
冬の梅	十六	冬の牡丹	十六	冬の仙	十七	枯尾花	十七
茶の心	十七	寒葉	十七	石路の花	十八	冬のかれ	十八
枯芦	十八	草くれ	十八	冬の野	十八	枯地	十九
大根曳	十九	あし菜	十九	葱	十九	麦まき	二十
生類の部							
鶺鴒	二十	千鳥	二十	然る巻	二十一	鴨	二十一
あし鳥	二十一	かひたり	二十一	ゆくゆき	二十一	雁	二十一
夜鷹	二十二	夜鷹曳	二十二	木兔	二十二	冬の鹿	二十三
穴熊	二十三	蘇実	二十三	罌	二十三	網代守	二十四
生海鼠	二十四	蛸	二十四	河豚	二十五	鯉鱒	二十五
鯉	二十五	乾鮭	二十五	ふり食	二十五		

時節の部							
寒さ	廿六	げきん	廿七	足袋	廿七	冬ころり	廿七
衣	廿八	ぬきん	廿八	紙子	廿八	火燵	廿九
煙火	廿九	火桶	三十	火鉢	三十	湯婆	三十
ふく	三十	燻く	三十	冬の子	三十	口切	三十一
納豆	三十一	ふり	三十一	髪置	三十一	袴着	三十一

炭竈	三十一	炭竈	三十二	炭	三十三
炭賣	三十二	炭賣	三十三	炭賣	三十四
冬の入	三十三	冬の入	三十四	冬の入	三十五
霜打	三十四	霜打	三十五	霜打	三十六
節季の	三十五	節季の	三十六	節季の	三十七
年の市	三十六	年の市	三十七	年の市	三十八
冬忘	三十七	冬忘	三十八	冬忘	三十九
春待	三十八	春待	三十九	春待	四十
年の暮	三十九	年の暮	四十	年の暮	四十一
都而	百四十一題				

四季合六百拾七題

古人續五不題發句集

種之部

月子金今宵一掃かけ後を
 名系くりともく足ん秋の月
 冬月ふ隼のまろや田のくろを
 今宵は月小毎へけとくさるん
 めのろや居酒のまんと類かろを
 月とまの今宵ふ明てゆゑとん
 冬はのろやのまの月や三五良
 宗因 寺武 芭蕉 未山 其角 鬼貫 玄圃

名月

名月や折の枝とそりく吹く
めいろう戸海もあつとゆもを
ちとふ麻よろふの月まよと聖の月
名月や車きしとけ 番家
めいろうや土手のそつれのあひた藪
随ふとはしも物よりふは月
名月やさうさうと歩行草の中
名月や轂の声と大のちを
めいろうや志とねととの朝あふけ
更くと鞠垣とこけけふの月
名月や今日と少きりふ秋の昏
めいろうやまきのふの雨は葉大根

嵐堂 去来 心尺 大草 浪化 路通 傘下 二水 野坡 言水 支考 夕回

名月や虫とこころよもとがら
めいろうや碇うちと波のちを
名月やほいともあたる日次とろふ人
焚うて一籠も困けしとふの月
名月や里の白ひの青と手柴
名月やまよとまよとあはれとら我
めいろうやとらとらとらとら我
名月のこれもめくみや葉大根
名月やまよとまよとまよとら我

社若 買山 知足 友幽 木枝 野童 浪化 許六 千那

月見

名月
西月

月見とる所はうのくき教もほ
月えせん伏見北城のさく廓
ふやくと坊へおし込む月えうぬ
隈もかく名もなき東の月え我
さしきよし我舟さしとて月見う有
鑰もなき庵の門う休月えうぬ
あきゆうな内は出く来る月え北
侍も雲ふなるう休月見この郡

とり火やおのれう海な休西の月
ふれととて宵くらふ森くふは月
各月や西よととてあふ風光を

芭蕉
去来
唐介
意情
得葉
洞梨
利牛
史邦

鬼貫
西桐
犬草

月

我糸あて我ふんせたり月夜新
中とととて東風とうやう直の月
隣より破風のかける月夜我
江の月や深み浅この蜷うら
けうとまふ少くはむく月よや
かろくと笠のうら月夜うら
子奴抱く湯は月夜のそくまうら我
おかりけお登りてかろあれ月夜うら
ととととて通を月夜野中うら
月のなれ中うらまうらも
京糸紫去年は月うら傍中間
襷とりの月よ鳥うらも

素堂
其角
仙杖
鋤立
昌碧
梅舌
北枝
一髪
長虹
万平
犬草
鬼貫

初月

初月のうらふ強かり雁のさゝる

言水 移竹

蜻蛉は寝ひ志のする三日の月

其角

電のまゝとてのことほろ三日は清き

文鳥

三日月や柱おとらわぬ高燈籠

銭芷

はしつ穂をまけておどり三日の

李由

三日月の数お道めはまきぬころ

万声

待宵や翌を二見へ道考と生

支考

まのよひや流浪のうら秋のそら

惟然

待宵はゆる賞せとや年のやと

牧童

まのよひや翌の連哥の表せん

素堂

待宵

三日月

十六夜

うらほなうらほ月待宵の興

若通 乙由

十六夜もまご更科の郎の素

芭蕉

そらうらや十六夜うらハニタラ

素山

うらうらや待宵眼はうらまら

其角

十六夜や音馬成物くかくは人

許六

うらうらや聖田うらとる神明謙

毛純

十六夜はけしき分るり比良待吹

汝村

うらうらや眠れまもなれ海五位

野塔

うらうらやうらまらうらうら秋

洒堂

うらうらや家出の定ひ入小照

乙由

後の月

らまよきまぬらう後月の十三夜
海山成お月をて後の月えう部
百葉は香気あつめてや後の月
影ふよよたふね海こえる月教成
後の月まよこめはくもや秋茄子
三日の秋風さふー後の月けを
後の月入るくかりー星は空
穂のうふ高低もありのちの月
寒よよけの巨燵もやー後の月
月をち体袖を木の葉の十三夜
草も木も此園ありや又の月
酒はまよて時のまよまよ後の月

素堂 去来 酒堂 杉風 杏雨 野坡 鬼貫 游力 斜嶺 重春 全暇 長父

龍田姫

くまなるのふき名とあれ新田姫
うかよよはりの顔ひやうと姫

和及 昨非

文月

文月や陰気感さる秋やのらち
かろくくする各月のむらりね

其角 良徳

葉

八月も下よてあつー赤とんほ
野も山も露よあねるを月お

指筭 李雲

菊の月

あつうま九月日和や藪の照り
長月やうさひ苗くお水くろぬ
菊月のほろみうあやし空の星

水奥 尺牘 良極

初種

夕の秋や海も青田の下みと
 初種はとれつ露さらあゝのほ
 種とつや朝日返はけしきとみ
 蠅とつふもやほら秋の日数我
 とも秋夜かうと見えとらんおも
 海山のとも霧とるりやと朝の妹
 秋まねとおととるけさやまきみり
 あきとらんや星も居るとわ夜羽風
 無林の雀種とほらとたの那
 海風もまこととよめうととるりな
 山水やまこと初あきの香葉散
 らきとらんや鷹のとつや毛のさし猶

芭蕉 鬼貫 卯七 去来 荊口 風囃 野鼓 林旭 杉風 支考 句空 浪花

七夕

七夕や梵論ほひいんとて笛と受
 けし合ふ我妹かまらん待女郎
 幼きやうた忘らてしとや星の床
 七夕や箱のまふさむかきとら
 土佐う跨ふあふのく人や星あり
 酒盛となうとて酒のむろいむらへ
 七夕よかき縁かうとし指合羽
 不し合や離別の中成さひて見え
 七夕や馬とくまよとれ川の端
 七夕を笑つて流るるを居るれ

其角 嵐雪 曾良 野坡 支考 去来 杉風 山峰 銭正 牧童

五琴

五琴やよるの志ふるる虫の声
 とてこらや三千人ふ轟ととらう

可風 希因

銀河

鶺鴒稿

新ひの糸

荒海や修儀小横とふ天の川
 くれやまぬ一夜よく糸をけ川
 西風の南ふからやあまのめを
 ちりぬき別色のらもや天乃川
 五夜の声まうらふあね天の川
 あまの川のきききりてもよけれじ
 かきくたのそくや繪入の百人一首
 鶺鴒や石火おりに北極もあは
 くとまのほ糸や移らひの糸すは
 七夕や糸の短くは井のくお
 雲さまのく短ひの糸も白たより

芭蕉
 嵐雪
 史邦
 八菊
 汶村
 宇路
 許六
 其角
 左圃
 一温
 蕪村

于蘭盆

招待

高燈籠

于蘭盆や燈籠くまきり光の燈
 盆ふ死ぬるとけの中は佛ふ自
 門並や高挑灯をまは中
 のけりのもりりても燈一盆あまの
 せつとんの柱ふとて人松のかき
 招待おまをほつとれと西へ行
 せつとんのや往來とともをあは板
 人裏と消くくともあまの灯籠つる
 子所捨お長老の門や高とらる
 てる灯籠をまきくあまの峰は月
 ころとらる秋の末村回よるあまの那

相曲
 曾月
 漢百
 朝三
 釣聖
 蕪村
 標良
 言水
 百里
 北枝
 長皿

燈籠

美女美男灯籠はとろろ照る
 天も花も酔て待月の大とろろ
 父母の親灯籠は海もぬまのろろ
 灯籠のこゝろもあがりけりまおとし
 灯籠の三度のけりぬ露なごのら
 とけりてふ風ふ吹くさうと川流るぬ
 灯籠小草の長者も出さず歩行

子角 宗因 由之 紋江 蕪村 蛸荒 左次

送火

おろそろおろそろはちと移る
 送りの火よとろとろ足のふふらとら
 かくりてけ山よの月もや家の敷

龜翁 元峯 小卓

魂祭

稲の穂は果さうりけり穂よんり
 多まよとろとろの妻戸のねとら何
 鬼棚やぬと血ふれと花あらく
 をとと女をさうとぬ家や魂まらう
 灸して啼しもあそとぬはのり
 芋の事あも風の女まらり魂あり
 魂はらとらとらとらとらとらとら
 そろとらとらとらとらとらとらとら
 たはまのり宿や八相常なとら
 魂よとらとらとらとらとらとらとら
 山伏や坊やを中らとらとらとら
 とはまらとらとらとらとらとらとら

芭蕉 嵐重 鬼貫 知足 史邦 谷寅 西柳 卓袋 調祈 百里 法園 越人

桐絲

蓮飯

鬼きつ子味つた山の木の實う那
ふまはゆつてさる、若きふまゆりう
魂ふあり門のえ食の祝とと人
待とらる隙るやあをれしうぬああり
竹の子は好むもちうてえ鬼ううを

桐絲やこの曉の闇伽能み川
とを絲や世おはつうの海、功主とを

文月やめてそく炊く蓮のめー
朝飯ふちて中ることよととの飯

湖水
来山
其角
希因
乙由

其角
燈外

季吟
里山

墓

詣

生牙

鬼

盆の

月

アーも孫子とるりて墓すあり
銀を罪のをりやるはあ
は夢小よく似てはあを墓あり
うらほくや家のうしとあ墓あり
三浦ふ六九十二の縁やほはあ

かけ格や生精美の袖おつゆ
ゆきはくは者所のりたととぬ
受うとた牙とよ落とや生牙魂
淵明う隣あめやうき牙なま
かつけても焼火くくしととの月
おりしとと鯛おきたる盆の月

去来
其角
嵐雪
卓袋
乙訓

一鉄
彫棠
百里
其角
蝶羽
舎帖

躍

踊る子や志町とふふけむら
をとり子よあまの島の草むら
川と舟とあまを江口の躍り有
おりあまの紐と踊るはとくうれ
食の湯の行舟出くる踊り素
けいせん此行臭くなら踊哉

宗因
去来
蕭山
尚白
李由
木導

西瓜

ふふふとふふふとふふふ西瓜
ふふふとふふふとふふふ西瓜
裏衣や西瓜ふふふと物の本
猪の鼻ふふとふふと西瓜う那
ふふふと西瓜切り秋の風

歌川
嵐雪
曲翠
卯七
陽和

火

小豆とトと火の信は割る音
おのうまふひ夜更で涼し火舟
西雲の遠のうらふと火舟舟
追出して千秋楽ふと火舟舟
舟のくよと火舟舟と火舟舟
うらふの戸のふと火舟舟と火舟舟

其角
且水
つふ
閑風
笑枝
序令

残暑

ひやくと壁を撃つて昼寐う那
朝も秋夕夕夕夕秋のあまう那
残暑と夕夕夕夕夕夕の暑あま
下帯れあまう那残暑あまう那
行くものうらふりあまう那残暑あま

芭蕉
鬼貫
海力
李由
眞素

相撲

雨降と夜忘きて移る角力取
 上手と名も優美なり相撲を
 駕うきやとこのまきよの取おられ
 角力と係あり波こそ砂場り郡
 扱ふれて笑歌中はしれまきよふ系
 小相撲のまきよあ、猪や藪ちうら
 お撲ふのころ小着より蛇の声
 なげほ小灯の籠うちけと角力死
 初秋や親よまきよ一すまきよ
 おもさけ小物うちまきよる角力死
 山くけのあ、天よしゆくまきよる系
 小まきよとワウひまきよる角力死

詩六
 其角
 甫山
 龜翁
 勝定
 尚白
 木導
 朱袖
 朱窓
 春幾
 盛弘
 秋之坊

風 種

秋風や藪もまきよ不破の園
 あられけりまきよほりよは秋の風
 他り木の系をゆるまきよあきけうせ
 十園ふり小粒まきよなりぬ秋乃風
 ぬらふまきよ跡もまきよあきけうせ
 雀ふりまきよもまきよあきけうせ
 焚くまきよの食はまきよあきけうせ
 まきよまきよ種まきよ風の流るひね
 浪登まきよまきよあきけうせ
 草まきよの裏めまきよあきけうせ
 木の股まきよまきよあきけうせ
 まきよまきよとまきよあきけうせ

芭蕉
 鬼貫
 嵐雪
 許六
 初候
 式之
 奪由
 四睡
 程也
 北枝
 曾良
 沙明

早稲の香風ゆり樹へちり煙の風
秋風や我と板戸はひらく前と
輪義のゆくりあつ海や秋のかみ
秋のせや二葉くまごこの福させ付
あきうせやまご四五尺は杉乃先
秋の風ひしの声くありせまう
夕くほの實をかうあつりあきの風
あき風やことーけ道の子うも吹
冷酒を止まらるまー向きけう
あたらせお耳の垢と道旅ー守
秋風や草を食れく馬の髪

湖雀 岩翁 毛純 游力 汶村 乙列 卧高 未山 言水 去未 希因

夕小入

扇置

捨團

初嵐

風ふ夕の入夕の又月のまるーの那
あーしや秋空高くさる日うり
くせとてても常なれた煙のあつきうね
夕書もつとるはるりのああれ我
添草の秋も仕入れる園扇うす
捨うららねーあておらん窓のあま
いんあふし夕とも青ー栗の毬
初あーしー鬼は毛並あそりきり
あさ暁の膳おひくあや初あらー
辻妻お鯉ひとく糸やう所嵐
ひくまうく入水のああや初あらー

負室 百人 横形 宗因 鬚角 淳流 芭蕉 宿深 珍項 野坡 沽徳

露

露のうつろふ金ふ落しは負つて
 赤の露と生つて露とそや起しそや
 朝の露はあつとふつゆのほろみろ
 露のあつとけ仕舞や淀のろ
 けぬは間や浅草のあそ客州履
 きのあつとけあつとけの草のつゆ
 葉よりあつとけのあつとけやあつとけ音
 夏葉の照のつてやあつとけのは
 古街正や露日に露はるの穂
 芝らさはほのあつとけあつとけ
 市人のあつとけあつとけは露の中

素堂 鬼貫 来山 言水 其角 之白 荒弾 雪芝 西邑 千子 蕪村

霧

霧の 叢入

二百 十日

霧のうつろふ金ふ落しは負つて
 霧のうつろふ金ふ落しは負つて
 舟よりあつとけのあつとけ
 吹よせとけ江の一隅やあつとけ
 あつとけのあつとけ水あつとけのあつとけ

其角 懐哉 楚常 呂翠 毛純

霧入のうつろふ金ふ落しは負つて
 やぬろや木の間のあつとけあつとけ

野経 舟行

日照年二百十日は風をよめる
 菜大根二百十日の残暑うね
 公羽卓二百十日もほろろあつとけ

素堂 李由 鳥下

稻妻

あめつちと稲妻と待たふらふら
 いまは手ふた併拜む野中の菊
 稲妻ぬかへくくくし暮の空
 のまは夕のこゝとて落るや山は夕
 稻つまず海のおりてとひふゆうと
 みる妻も馬引かくは田面う那
 いなは夕や雨の鏡おりのかけん
 稲妻や折く一敷のひまうと
 いな妻の待つくく庭は戸板うら
 みるは夕や池よまは夕宵の園
 稲妻やちほくくゆるせくは城
 いなは夕や行末くくの小家うら

芭蕉 野坡 史邦 侗梨 氷花 湖風 幽子 卧高 素洗 孤白

野分

ゆくへなき雲お組く野分うら
 日枝高く吹かき候はむとて我
 手よふくぬちりく草の野分うら
 舟分うら雲のりそきや乾ふみ
 るるさく一のまゆりととるが分は
 おのつら草のちるんは舟うら我
 鏡おのぬりまのさあ野分うら
 らはやまの舟の朝はていさく
 冷くと朝日うとて野分うら
 鶉の尾おはれは舟うら
 河奴そおとて舟うら
 吹くや野分うら

未山 言氷 探志 正秀 圃葵 琴風 柴友 支考 荊口 園水 之順

早稲

早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海
早稲の香やふ入る 右に有破海

芭蕉 去未 牧童 支考 松鶴 貞室 丈草

穂

穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり
穂穂拾ひ 穂の糞を捨みたり

鬼貫 荳村 青角

木綿取

後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥
後ろや琵琶ふみくさむ 井の奥

芭蕉 孤屋 湖水 泥燕 富豆 許六 何之 椽青 遠水 蝶夢

田刈

晚稲

晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り
晚稲田の穂をるうや 幸運り

遠水 蝶夢

はるき
召

いさみ箱まのかくとさや司召
拜ととて鳥帽子落とる司や

山店
太祇

逆峰入

七多清う借都かけり逆の峯
出子入や雲をまの毛よ喰ちの

淡く
波上

後彼
峯

彼峯さくらと殊の月こそ西にあま
風もなれた秋の彼峯の縁月し

宗因
鬼貫

初潮

初潮や細いとこ流小帆うけふ縁
ら川ちほも驚くけるは磯衣我
けりつ波や小松の中月月の親
ゆしやよ追りれてのちる小魚我

嵐蘭
和及
乙河
蕪村

八朝

八朝や二日の目とまこくれととを
八朝や胸は後ほよれた樹くまひ
八まくや替は聲はそとりのまひ
八朝や踊つて足次かここすれ

宗因
乙別
野坡
乙由

駒
途

寺くや清あかそあるとほむ久
まうや中る函谷やうみ新馬途へ
菅のまやこころふ目くも駒ひえ
駒ひくひあそまゆしや額ふ

乙斎
其角
秀風
蕪村

駒
牽

駒牽の木乃や物くん三日の月
京のまを皆らほ望きの度りま

去来
浪花

放生會

案山子

うねりけお羽虫とらるり放しとて
海老箱も実入り頃とや放生會
人ともるるをさおつあり魚とらる川
先いさるの款お達へとやとけし鳥
はまきいといらる案山子の腰刀
はつありと刈るる跡のかしとけ
えとらるせの虫身ふてたあのかし我
山越る案山子けらりて笑ひたり
ある人もなりてけらるかしとけ
物お音のあ吞心懶とかしとけ
もあつてけらるる案山子け

桐 兩
史 邦
露 川
鬼 市
去 来
諷 竹
呂 洞
重 五
惟 然
雲 口
光 山

鳴子

引板

そのさるる後田守らわかくらる
世の中にくえと弓とる案山子け
一夜さもゆりて森をぬくしとけ
あつんほりと山田のかしけし雨とる

全 案
如 泉
卯 七
和 角

鳴子曳二日の月もらるらう那
七十のこもそとるなる子むき
是酒の教る門田の鳴子ひき
なる子引おのう是座をおとるまぬ

言 水
其 角
野 坂
乙 由

山けくき日の出れ虹や引板の綱
中まはるり詠呼子とるひとけ

龜 翁
蕪 村

落船

村くの森らうろ文ねかこりて
小山田のうろ落船を日やねと

甚村
太祇

淡船

表のしと市と船の暮のよひ
淡船やいんと栄れ夢のうろ船

杉風
寛満

落船

落船の水よあうはうれ世うふ
追落を船のよとみや石のおと

勇松
横儿

初駐

駐の州宿と豆腐は兩夜う菊
うの駐と落居も客といふれり
さけふ人てさう波のそり川辺うか
うの駐やか縁て荷おの宿るふん

素堂
寒玉
團木
昭徳

嶺祭

ぬくくと殊のゆくとやうるき祭
まの祭の奠ふはとやうはれ祭

太由
太祇

すじ

ゆか雲や雨をまよふは懸はり
さしさら府家より路とさきう那
甘いと詠るはふもあうしと見路

野坡
昌長
半残

河鹿

あやまのてきうあついの河鹿うさ
あまよははねてうきおさかうら

嵐紫
園友

沙真

袴のうきとせ詠をよと非まう菊
指買の駒りうとや流は沙真
四っ手舟をせ買よらん月見川
沙真はりの小舟漕たる紅窓の女

巴山
朝叟
菘白
蕪村

升市

ニッ買欲をわもをー升の市
むろしそし遊女お逢ね升市
市の月ろふの九合の月もをー

一 屍
作者不知
涼備

新そは

新そはや夕給修吹を多ふそ
あん蕎麦や名家で通体唐辛

支考
夏晴

砧打と我ふまろや坊は法
おりひあまの悪る名をろろ礎うお
相槌のろろあて吸るまろころ有
まろと打人も裸くろまろけけ
を御の給ふりをまろまろまろころ

芭蕉
鬼貫
山川
鋤立
去来

擣衣

鼓からまろとやうたあめのおと
ろろ馬は拍子あろろ砧の素
あめかろろと遠くかろろまろころ
旅人か村ところろ砧あろろ有
とろろはろろなろろまろろ川まろころ
山里の砧やまろろあろろまろろ
生業をちよろろくまろてまろころ
辰まろ起ろ酒のむまろころ那
まろろまろあろろおろろやも砧ろ
ろろあもかろろね市のまろころ我
ろろろはろろ現再つろまろあろこ
ろ日月の砧は道の砧の南

仙化
巴風
破釜
全峯
一笑
是吉
千川
應
孤舟
立志
七里
万声

寒

中々きし早稲はひんりの角芽立
足らぬき朝戸はおとや中々寒きこ
中々いしく人をうらわぬ移るごとく亦

野童
北枝
乙別

朝

寒

朝さふや中々きりみそめて葉の花
あさきとみ酔のまきねよけりさきや
移るごとくや園のむらさきのひくくき

風斤
北枝
蝶爰

病人と清木の中病うれ我きう糸
落しは髪のおとさるる夜さうう好
松うせの新酒をさきまこと我き我
子く等ぬ猫もかぬりとよきと比

犬草
許六
支考
其角

夜

寒

泣く夢さめてよと泣我さふう糸
あてもななきるを夜きこのおひくれ
榊は葉のいろりよとるる夜きう糸
まこと一毛荒しくまての我寒うれ
我きさや痛塗おとふさうれり
客人の夜きおしけける我きう糸
打鍼は音やよさうの障子こ
まことこの里さうの我きこの火打我
欠くて月もなごるる夜さふ糸
木はくさふ鼻紙あつる夜きう糸
牛屋土中袖を氣はくさ我きこの那

末山
諷竹
仙川
百化
程里
汀芦
其流
蕪村
風麥
李由

新酒

新酒の秋をそとわりの明石米
 早稲酒や稲穂よみ生を焼くり
 風よ名の付く吹より志ん酒う好
 妙さけはあつても青泥月足この春
 玉稻酒や禿倉ふかけし牛の筒
 新酒らむ少盛志らるなり砂はう人
 松の葉も紅あふとるりて新酒う系
 袖はまふりつ是し雲や露志く色
 菊の香れりのよはく日や露 肘兩
 ぬえのりまやうりして露しるれ

宗因 其角 その 酉花 虚谷 亀翁 渚九 嵐雪 希因 凉帟

露 肘兩

秋 煉

秋 空

秋兩や 伽羅割らまこの錯差し
 さらさらくくうら好海く秋の西
 煉のあめ鶴は尾の志うりまり
 松の葉は地よまきうらふ秋のぬ
 あまきさかやま底の草を踏雁白
 秋は多明らうの系よさう線う好
 籠のそら尾上の松よとねれより
 渥け木のきもさうらひや秋の香
 縁よりちたそらに走休や秋の雲
 風の根を照しけしるりあだの雲
 上ゆくと下つる雲や秋のそら

次風 點 吹 狐 義 ぶ 草 暮 村 曉 暮 其 角 支 未 大 草 卯 七 凡 括

穂 ね
霜

芭蕉のあやまの霞くもぬ秋の霜
うらと赤き露のかしらやあまの志り

芭蕉
史明

長

夜 ね

九度起るも月ね七ッの車
うらき夜を肌氣の涼りと換露の
おとまりの長さ成けんとこの山
柔のこねぬもなうー猿ねこも
ふくまをこつて長長きはくも
栗押を夜長ふくまう人秋三
腹よりておろりね秋や萩の声
なうね夜をむしお成るる源流
おつきよや蜩の声も長根者

芭蕉
史明
北枝
野徑
怨詠
草土
蟬年

暁 あけ
の
暮

この道や行人ふまふ好むく
あまね暮祖父はあつりまのふそ
舟名は名をの秋ね夕さう船
癖小かろてら且しや秋の今時か
よと従尋尋糸よりのり 程のなる
夢の穂やひよりこあれく秋ね思
あきのくれらあくかきくさう牙
馬牛ね脊もさうされー穂の昏
夕らう穂へし何もあねとも秋ね海
あきのなる苗もほらうねと降りる
人を住居をうりすことや秋ね昏
秋ねととるり合もなう舟遊山

芭蕉
其用
嵐雪
千春
玄梅
程巳
倚兮
松智
肉友
山店
菴常
紫紅

柿

昔中も今中ららけりあきのくれ
種らましくさひしき炭の白いろ
石切の音も伊ちり秋はんと
谷川や茶袋そくくあまのき
僧の居居總のまをれよ秋は昏
鳴猿もあきもかからと種のとれ

鬼貫
昌碧
季下
益音
不炊
車庸

柿ぬしや挑も迫まあし一
帯落の枝は音まきゆ山な
詠柿や障子ふねふ夕日つけ
採らるるのそふ供のよりとと
供柿のつらまて枝の住居のま

去来
素堂
丈草
利牛
龜翁

葡萄

葡萄

月日は粟氣葡萄のつら甘露のり
酒はは露のけくまやふたう棚
柿はらるるそくあ淋しき葡萄くれ
さらゆりぬたう人まらるぬとらひ

其角
史邦
仙老不知
打睡

梨

今宵うる梨の帯とく男部を
青梨やうけぬつらせん秋の水

沼徳
日幽

若
良

かけらるる小豆別あり若烟中
はくく入市日ふねうりるあを粉
若たをを既ふ一あくの灰と形り
虫と下糸床しきあをこうな

龜翁
晚山
龜世
若相

一葉

水の端一葉あふちうくおしき 赤衣
ある秋のまじりまふころより 一葉ふ我
角丈宗の桐の落しは二葉あくる
桐の多あや 落るころをまよ居は
庭掃くそはくひくんと一葉あ

其角
とて
甘泉
苔蘚
風徐

柳 散

庭をいで出るや ちふちの折
月知と河折ちり残る木の間より
まよの妻の用意や散りあまき
行馬のまふあもちふ奔り
さひくまや 飛井殿と散る奔

芭蕉
素堂
桃隣
李東
壺中

仲の 翁

七草小蘇味増のうはて秋の翁
仲の翁ちりてお母茶のこなるり
秋條一人切七草は草のよね
と早お翁 然も味となりにあり
我うちよ嘆てもおはし茶のむ

言水
東滝
風園
曉臺
五能

女 郎

ゆえんうよ酒は後のをさる人
けふけの賀あふ翁や女郎を
女郎翁あふとらあふあふあ
松風の里お泣くあをさる人
はあくと露けし露雨の女郎を
おとらあふをさる人や山石の女郎を

鬼貫
杉風
野童
淡口
乙別
秋之坊

木

槿

道のまじり木槿と馬ふ喰れり
いくけ垣をえおろくま麻入きり
ねくまじりと木槿のまじりまじり
川音や木槿さう戸ハきり起き
けりまじりぬ里は木槿の白ひりま
一くくま草紙やまじりまじりけ垣
ひりの間ふ脊戸の木槿ハ咲ぬ
まじりまじりの地は栗や木槿垣
布ふ煮てあまりのまじりまじり葛の花
おろくまじり谷をかきまじりまじりの花
散りてまじりまじりまじりまじり西

芭蕉 観水 土芳 北枝 四照 素牛 如柳 見壽 沾徳 桃隣 北枝

葛

鼠尾

藤袴

蔓珠 沙氣

男色

鼠尾草のようまも脚各解久び
みまじりまじりまじりまじり
鼠尾草やまじりまじりまじり
夕日まじりまじりまじりまじり
西のまじりまじりまじりまじり
かまじりまじりまじりまじり
まじりまじりまじりまじり
黄昏まじりまじりまじり
秋の野まじりまじりまじり

鬼貫 其角 曉臺 招兮 武 其角 寸木 麥志 半睡

朝顔

雨さうほの酒盛ちふねはうりか船
 朝顔も志もさし人や契帽子
 葬やよふの薄の結実やや
 船鳥の白きと露もつゝえぬなを
 雨さうほの赤一輪もなりのふちり
 雨さうほや霞は故中の焼わらり
 朝顔はや樹中垣の這あまを
 葬も笑もさしと志もさし
 雨さうほやまきのあふふらふと
 朝顔の産まのよけし鶴は声
 雨さうほや雲の白朝の今と
 葬も人さうせおる蔓くを

芭蕉 其角 去来 荷兮 舟泉 昌房 杉風 北枝 牧童 其糟 蚊足 山川

芙蓉

秋海棠

秋木瓜

雨さうほや初この水も残は月
 朝うほや虫おくらほさきの運
 葬の種とほとまきの芙蓉の葉
 枝ふさこの日にくわえ芙蓉うさ
 百合のさ芙蓉を結るいのちうさ
 雨さうほの小刀もあり芙蓉
 雨さうほの紅のなまや秋海棠
 秋海棠ひるを結るうほのさ
 秋好の妹をうの縁よる木瓜
 雨さうほの草の中に我木瓜

胡及 末山 一笑 芭蕉 風友 佑徳 支考 素浅 韋吹 踏通

萩

萩亦や一夜ハヤハセ山の犬
 荻ともみえとを露あり庭に萩
 暮芳のあひとを萩のあひき我
 朝露れうちぬと萩の徳ひの露
 萩さうら麻のひそりお庭ふけん
 萩りやや萩の子あふりそと水
 比岡の露やかりあくと船の端
 とけんはけりかえ北野のみありうれ
 工は庭とも見えー萩は露
 萩よ来きまふりそと雀うま
 村雨や萩の根よあ萩蟀の声

芭蕉 其角 土芳 未山 牧童 猿 忍市 車庸 兩邑 冷袖

萩

荻
 麦
 萩

萩の穂やひをけうむる生り
 友とよとれ萩も又車の萩のこえ
 雨此日や萩をぬふそは庭の萩
 あうつきの時焼まー萩乃ら萩
 萩萩や春の季うらぬ梅さくら
 荻まふりうらぬてりてまを山路うら
 やうてうらよ捧くらうせんそはの萩
 萩火のあふりてうら萩まふりな
 暮すらて盛らせけりそはのと萩
 うら萩まふりうらぬ木乃大根

芭蕉 鬼貫 卧草 岩翁 貞室 芭蕉 宗因 荒雀 雨汁 園如

稻のむ

あつさどもあひさほけり稲の花
七夜の露のけしきやしのねはこ那
品川をよみあれてまきししのねはこ那
吹ふぬ風の目まきや稲のこね
鯖鈴のま居ふ敷りねらねはこ那

遊力 智月 峡水 已百 遥里

番椒

そのりこ本も紅葉しにり唐うじ
番椒茄子小あけもうとつれを
そくく道の蛭助のやとりや番椒
玉虫の羽しこのけやたうりか
いとろけくえてるるりのや番椒

宗因 未山 米岳 探志 野坡

系瓜

併ゆも是あを割馬系瓜の
まきしや系瓜の系瓜捨りた

鬼貫 南甫

瓢

針左の控く這入るるるるる
藤まきや起ことととも音あへ
ろくもく芽あまきゆる嵐う茶
そのあくと音を以てあまきゆる
まきしはのそくくあまきゆる
夕顔の花あまきゆるあまきゆる
竹の声許由らひまきゆる
葛又ふちや倦まきゆる瓢の茶
頃れの目鼻かきゆるるるる

許六 季邑 土芳 風草 和及 其角 希因 蒸村

蓮

蓮の實は花の心よりともたまはるる
くまは實や風もものくまをさるる

嵐雪
百里

蘭

らふの香や味の細ふくまきこもの
盗こころ蘭や乞食の簑の下
秀くは涙のまゆやまきや蘭
よるの蘭まふかくまをさるる

芭蕉
嵐名
宗因
蕪村

とせ
次

秋風小巻を折らるる芭蕉うら
まらるるて芭蕉のかけの小僧我
家こほりまらるる庭のまきまら
音雨ふれまらるる芭蕉の栗く角

凡兆
遠生
困之
村

花
野

世の中をかうらまてりん花野うら
みくかみね風か花野のまきまら
味風のまらるる行を野の南
馬道もしらて月を花野のま
山伏の火をまらるる花野のま
りきあふく牛のよまらるる花野のま

胡故
近燕
卜志
探泉
野坡
野徑

桔
梗

野のまらるる花野の衣まきまらるる
秋行くまらるる桔梗の蒼のま
村雨やまらるる桔梗の波桔梗
桔梗のまらるる花野の持佛堂

徳元
左次
幾紫
荻村

薄

紫苑

角文字やいせの野飼のと好芒
 燃きれく盛燭をなく係芒う系
 鹿きめても起ちうくなく萩薄
 花さくた戸外をさすまれ一夜き我
 抱おとと雨のさくき泣えささうれ
 穂きゆをさす穂よさ夕加の畔
 初とくと月とさそひうる暮る有
 おりし移さ急あらええ白薄う有
 ま移きたひ人みなうさき芒の那
 野兼らと折くえあろき紫苑うれ
 なううさき紫苑の下北野兼うる

其角 荷兮 路通 牧童 苔蘚 芦本 野坡 鬼貫 来山 笑林 蕪村

野兼

鬼灯

重箱山麓からたとき野まきくうさ
 さくまくにたきく笑まう小野兼うる
 の道の野まきの果を渡可程
 玉川社道くとちを地まきう那
 松う根ふふ代をあもろは此氣我
 根を石小これ川系野まきうれ
 角石を拾ひのことせー野兼の角

鬼灯やおとひ齒かくと娘の子
 けくけまの傾城のふく細子うれ
 うあめあう鬼灯吹くや猿の貞
 鬼かや清原の女うせうめー

其角 句空 柳宴 露川 示参 龜翁 尺牘 杏水 進寄 泊荷 蕪村

鶏頭

鶏頭のひくをら川をや塗まら
岡寄をみおもふねまふ鶏頭
花もつり日と残りけり窮民
雞頭や紅錦繡の車長まら居
又これふゆを驚くさん鶏頭
鶏頭や唐のかしら文日この
雞頭を思ふうてふまやうの月

丈草 史邦 野坡 林鳳 安信 龜世 文鳥

蓼花

蓼もらう一佐野のあさりの蓼を
蓋小まをうを喩ひるの蓼の
捨鞍やはらりもまゐるたを
三経の十歩一まゐるまての

其角 琴風 堤亭 蓼村

稻

稲雀茶の木をうりや途ととら
い稲う川く世に世にうあぬ我
文は夜や稲く家のうらひ声
稲塚小高次らうき川系う南
さまうく稲さうり奇もかりたり
稲村の勢をまうなる蓼う系
い稲といふ名もまかりや妹う門

芭蕉 凡兆 力平 横儿 ち稲 狐屋 史邦

蘆穂

一本の芦れ穂中せしぬせまの系
引舟の跡よ起しは穂芦か那
あしの穂小笠う川方や客の暗
芦の穂や解をかとして折もせん

防川 全孝 去来 其角

尾

ぬる襟や尾巻袖の紋とこ流
 白玉の尾巻をくわたりぬれまら
 さく波や穂よ出れ先の尾巻川
 山伏小鼻うまうれくは尾巻の
 起りうは葉のりなり水のいと
 葉をまける跡まわつゝあもあつり
 雀の声葉七又のなうめこの葉
 まく葉く葉根のかきりや山畑
 欄干にのりまじり葉の影法師
 菊とくろり葉ある香方の曇り那
 梳かくのほろね宿居や葉の影

重頼 楓子 負室 東朝
 芭蕉 其角 嵐雪 去来
 許六 杉風 李由

菊

え来やけりとの葉根のまくのい形
 街定の外うやまきくはまうさうり
 行馬はあふ葉影一葉の茶
 酒らまふようたる彼うや菊は葉
 葉細先へこくむとある一の形
 さつゝとに葉くぬるや庭の葉
 百葉も葉くや茶の分は南向
 ちかまきのいふあまき夕まき
 塗物おらうらふ影や葉のいな
 菊の香よなうや山葉の古上戸
 まくろの粒とて一佛のうてか
 葉のまのや古丸難波の香手とめ

負室 宗因 鬼貫 梅盛
 正秀 幽宵 嵐竹 諷作
 木導 北枝 千那 千川

未枯

うらむ枝やそれらけきと志のふ山
未枯や鮭とくみぬふらうり中
うらむ枝や豆腐をうりふ門の桶

毎閑
馬子
青峨

鳥爪

保戸々谷の夕日やこころ鳥爪
市人の声あもあつとかふと爪

亀翁
拙雪

葛

蔦かくと亭まのこひや牛の昔
葛の枝あや貝売あふ山石北河
石山は人もも葛のうらむおひて
葛のうらむ月まこ足もぬ梢ふ

野坂
野高
乙州
里東

梅
の
と
え

あそととや温飽るそくの梅のとえ
初よるのふらまてかくと梅をとえ

之道
乙州

ぬ
う
と

うらむぬのぬうらむ角やかこつあり
朝うらむぬうらむの蔓のはとうれを
うらむはの蔓あふ余りうらむぬこえ

専今
及角
蕪村

芋

煮てる高野山よりして芋
芋もや実のうらむとそと日月
いもを焼て酒をまき風のきうりうれ
秋あてもあふら物といもの蔓
芋を抱く酒もあなうらむの淵

宗因
鬼貫
其角
西谷
桐橋

男
葉

間川葉や有とじわした筆電のほの
まのひきまや暖ぬそおりのまき

晴臺
一邑

刈
萱

刈萱や露のち新の草はふり
かろうやとあふしは跡もようり

牧童
巴犬

木
犀

木犀戸六尺四人かろゆうと
りく世いの花は室あふね夜を

其角
為有

木
法
実

賣者の一徳出まぬより世かや
あもの朝梅檀の実れとあれり
きひーさや吉舟をかやよおりの

西雀
杜田
桃隣

推
の
実

同来うー推の里の松葉うら
あまうらうらねや推乃九折
村雨ふかひあるうけや推の音

其角
三翁
岩泉

覆
花
実

下紅葉覆の実をうらう白ひ我
うたなふより油ふはり花覆木比

其角
路通

栗

生栗と振りほわくは山路ぬ
穂栗のふふささけくる法の場
栗の名のあふきもの栗の上
落栗よ芽ゆさかふは嵐々那
越栗の笑ふも淋し秋の中

其角
嵐雪
惟我
透雲
李由

熟栴

木傳りて穴然ゆれ熟栴の南
小上戸熟栴の林かく息こもり
象の啼くまゝに流る熟栴は

本草
一蜂
百花

紅葉

山ぬさくところと表やらの紅葉
白くみりみちの外はなつらの町
あふねくとりのいひてえるおき
肌をいへ切山のうきとこみち
りみちえや火打らうのそ流火縄
山川ぬいけりかゝる紅葉の南
知あつて指よりみちを志くせたり
りりまて、夕日暮るるの紅葉

其角
鬼貫
東順
凡兆
野坡
如柳
秋之坊
野童

茸

松の葉あつその火まらうけは油
うち木とるおけしきれを複茸
柞落しし松茸とるね白ひのま
松茸や圃中裏の中お栴くえは
この茸の裏より朽体日陰うね
まの茸や番をお駕して息くく
紅茸お明野の比丘尼なんうや
はの茸や文まき声はなうり

其角
嵐雪
真鬼
園友
石蓮
為有
木導
吾仲

茸狩

茸かりふ日のまゝ高し園の杏
たけうりや黄茸も見い候し息
茸うりや人かたゝれぬ真は先

水真
利合
去来

虫

野々多き草や風ふ吹くる虫の声
 今宮の虫とて後なり侍んほし
 暮はちと芭蕉の虫とてく虫の声
 黍稗の壳もくさるやひのこ名
 ひの音や園宿舟の藤菜の中
 燈明よむもよるや比叡の山
 虫のまや木綿雨のわとくま
 玉根まよは慕風は中や虫は声
 生れはく草のまよや秋のむし

鬼貫 未山 許六 壺中 養浩 穂葉 汝村 李由 文鳥
 汝村 樂峰

蟋蟀

蟋蟀

秋草ふゆのゆくりと黒き蟋蟀
 しらくまらるるて秋の小てみ我
 あきの蟋蟀一葉と散るや夢の中

万子 牧童 桐

秋蚊

秋の蚊や血よ吸ふれたる醉とら
 秋は蚊や友の城のを泣けり

肅山 只言

蠅

蠅打をまよと捨ぬるり浦のあは
 あきの蠅くくふ喜せぬ日向れ
 秋の蠅くくをむやく足せし

泥足 史邦 秋之坊

秋螢

秋の螢二夜をくくく窓よふは
 月は夜をくくやくく秋の螢は

蠶打 櫻良

松虫

松のしづみきり福をまねた友も好し
まろむしと跡さるるふる断つ糸
虫をとりあつたあともり鳴よけり
あつ虫のほ夜ハ松の白ひうお

其角 車来 一髪 沙明

鈴虫

鈴いしのゆりまきく啼雨夜うま
とく虫や松明先へ落をせま
鈴ひし客をかんとや廻り様

季吟 其角 凹觥

蟬

猫と喰まじし蟬の妻ハとくくら
蟬やかろりとまろく小半月
我宿のころろきをせま鄰り角

其角 荷菊 百里

蓑虫

蓑虫の家崩しと野分うま
みのむし吐啼て枯木の風情うま
蓑虫を千種の花はかくしう那
このむしの蓑ハ常や草のほち
みの虫や妹ひくると鳴ふまり

句空 淵泉 史邦 村

蜻蛉

山の端を舟んまかんとや破れま
蜻蛉や追うけてゆく泊せんな
幻の秋のゆくくやあうとんは
蜻蛉はまてら蠅とほままの中
とんほりの鳴をかゆる夕日うお
蜻蛉のけんとわけてる廊下哉
日を斜園屋の跡にらんはるる

其角 汀雨 支考 大草 沾荷 斜嶺 荃村

蟋

蟀

床おまきくいのひきふりのや 甚
まじ月や露をまきふりきりく
灰け桶のやみけりきりく
やまきふり声をかききりく
秋の夜や夏と断ときりく
まきふりや先へまきふりく
引まきけて羊に首ありきりく
おの声や露よむせりきりく
賣字家のあいまりきりく
なうし聲やひきくあまの蟋蟀
まきふり穴ももろくまきりく
常盤や壁あまきりく

芭蕉 其角 凡北 智月 水鷗 多川 乙羽 從吾 范字 幸坊 大州 嵐雪

竈

馬

鳩

鳩

夕を老ねゆひうまねくは蟋蟀
古城やまきふりなるまきりく
まきふりくまきふりまきりく
居風呂もりの入れくあり甚
啼や竈馬まきふりの備りきり
情まきりや月の各残を啼く
磯際浪も啼入るまきりく
食のこま袖味啼の釜れいり
かまきりの鎌はまきり露の玉
鳩やまきりくまきりく
うまきり北鳩ふまきりく

素山 鬼貫 舍羅 希因 越人 正秀 唯然 程已 銭正 北枝 凡峯

冬虫

秋もくやうくくとあつさをとる冬虫
川株お足引うねはいるとくま
二冬ふたは青田ふせーをさう那
暖夏は引よよふむいふとかな
綿の管母巻廻らう冬虫の南
竹の戸の蚊帳ふとひはくひるとう船

風 國
溪 石
雨 柏
為 有
昌 康
伸 風

蛸

日くどじや捨てさるるもくく日を
蛸の声そらみこの親のはと
むららーやまこ人ねぬる瓜をこ
ひくくーや松系ふ倦をさふめ茂

そ 七
跡 五郎
涼 傭
其 梅

渡鳥

浦浜や通一の交はくくりき
山端や渡りはきくくる鳥のあゑ
日と西ふ西のこまをさやひくりき
吹息もさゆは財ふやまうり鳥
聲のつと小鳥の中は迷渡り

去 未
去 草
野 坡
游 力
近 之

小鳥

秋の野やまかくは小鳥の小鳥
板葺や秋の小鳥の歩行音
小鳥もは音蟻しさよ板むきし

鹿 谷
落 梧
蕪 村

鶉

榎の実教る鶉の羽音や朝處
夕くまのりてなると鶉の羽音う那

芭 蕉
保

雁

酒買舟ゆく雨夜の雁こしら
 厂うみゆゆはく浦社名を我
 ち川厂や報りちある茶湯客
 起くえて夜明人なり厂の志
 厂う移もち川うゆまのひまや
 初雁や比良く追舟帆うけ船
 行厂の友社法をまうや奥の樹
 ノの行くうまかかぬや傲田の橋
 鳥帽子着て白き羽の落小田の雁
 かてう結の糸下ふなう時行継
 ころ雁も行灯とあまはらうらめと

其角 馬見 風園 万平 越人 木郎 惟然 北枝 嵐雪 夫来 落格

鶴 鴿

せまき足の足りとかはれ一松の雨
 りまはくまの鶴鴿の尾の知りう船
 せまこれのや蟹土と移る畔のうへ
 度りめもら且まて小鴨の草鞋うま
 目を繕一舌舌も書一休縁の声
 鴿啼や木舌舌うれうまひぬと
 此本林もさかくこまのりりとおと一

芭蕉 史邦 磨盤

鴟

四十 雀

老の名北ありともまらう四十雀
 世の中や海りうらうて四十から
 かーとけぬ出てまらう四十雀

芭蕉 鹿谷 可吟

嵐雪 歳人 露川 蕪村

鶉

燕

桐の木ふらげく啼くを休塚の内
 伏見ぬハ町屋のうらふ啼く鶉
 日あつりせせりうりなうと鶉う系
 馬まよみまふねてなうらげら
 う川鶉時計の六ッもらうせちり
 ぬ啼小夜を待ぬうと鶉う那
 旅人の小判とけりうはらうな
 栗叶穂をふぬは付や啼く鶉
 中島も落付て啼くうげうう船
 燕もお寺の太鼓かくりうう
 芭蕉屋もとやうと啼るつらぬ我

芭蕉 去来 正秀 岡高 史邦 山店 園友 支考 露川 其角 凉傘

鴨

鴨

鶉

刈ぬとや早縮ううくの鴨の声
 石打てまるとは鴨おあられま
 あらふう川姥鴨とらふ多うら
 鴨突の行氣長き日あうう系
 泥垂の鴨も遠きは夕ぬう那
 鴨細と風のぬいぬれゆあをう船
 鴨の行方これと山女のを
 ひよとりやうあの日和をけう声
 居りよさう河系鶉する小葉畠
 高土手に鶉の啼日や雲ちまれ

芭蕉 言水 亀洞 児竹 其角 湖舟 李園 荻子 支考 珎碩

鳩吹

淋しき鳩吹まふふとりの
鳩吹や波撥糸の若くまを
ととふくや太山にきき下り

野水
珎碩
甫山

鹿笛

鹿ふえやや中を狸のこらつみ
うらうらうて鹿よ笛あくさんか

征元
大山

鹿

小男鹿やあそまき声より此流
啼鹿を推の木のあふえ付り
北崖 哉や町をうち越鹿のこ
朝鹿の身ゆかひ高し堂れ椽
鹿の目れ朝日にひうか高根う有

其角
去来
犬草
許六
李由

あそれさや日の照る山よ鹿のこえ
番の火をさあよりあ鹿や鹿の取
後々々として道なき鹿のま向うれ
さひしきや尻うささる鹿のまり
鹿啼くやとんと波うの声は跡
元山の松をよせまき鹿のあらま
尻をよさかや夜明の鹿の声
かんせらぬ四足さうゆる小鹿う亦
かまきひとあつとあや鹿の声
膝をよせてはくさあ鹿よりみちる
あうらに鹿さうのしき山あれ
三笠のさと鹿や後もかいらうひ

万乎
探志
不障
木導
野坡
知足
風曉
波村
蘇葉
半茂
句空
季吟

行 煉

冬 近

行秋のふをさひりや青密棋
 けあきの細く人をさうせしり
 ゆく秋よまらるあともなれ給うを
 ゆくあまふ教ある家のあはしり
 行あはや晦日のあはれ星の影り
 け秋の四五日ようは落の南
 行あまやを鞍ておくる風の神
 木さるうまきて揃うら行あはを
 ぞしもまや良是あをより九十日
 冬近し附西に雲もあつようそ
 めのいそ、雲の志らねん冬近し

芭蕉 越人 牡羊 浪花 乙草 東以 来山 蕉村 櫻村 櫻良

初 雪

古人續五百題北發句集

冬の部

初雪のうけか、ア、橋の上
 ちの雪のうけか、ア、橋の上
 初ゆきや裾、ア、橋の上
 花とよむ雪ふはあみらるる
 ろのゆきや裾引てあ朝戸うれ
 初雪や彼よ伊吹の風を川を
 ろの雪ふはあみらるる、朝朗

芭蕉 其角 嵐雪 来山 野水 千那 史邦

初雪や ちの草履あき隣まて
 ちのゆきや 松あかきて 兼の雪あき
 はの雪や 一面よ 階を 漱田の橋
 あつゝお 琵琶の くる日と ころ雪と
 初雪よ 麻の 角あも ちのゆき
 ちのゆきや 人よの 先よの りん
 初雪も 花を 不とん ちのゆき
 ちのゆきや 人 結市の 松かき
 その 花の 初雪 買ん 雪あき
 はの雪や 麻言 小いひー 夢合
 ちのゆきや 小阪よ ちのゆき
 初ゆきや ちのゆき 伊用の 尾ふき

忠通 北枝 李由 山子 紅雪 三ヶ 斜嶺 之道 氷花 知星 配力 朱袖

雪

ちの雪や 人のありく 日のきり
 柳ねね 初雪あき 木賊山
 雪ころも 梁あき 住居の事
 ゆきの 日や 船政の 教れり
 このゆき ふゆい おとくも
 雪の中 お居る 雪の 山路
 ちのゆき 山あき ちのゆき
 横壁よ 織せく ちのゆき
 曙や 伽藍の ちのゆき
 十四や ちの海 ちの雪 門
 ちのゆき 根の ちの雪 門

楚常 石周 芭蕉 真角 嵐雪 玄来 丈草 支考 荷兮 許六 宗因

酒買のめり子筆うせ雪乃る
ゆき降や若流の門を拂よけ
うさあやや雪のあは山きくの山
車道なるなれ冬つあしう有
くつき夜小物つらうりまは隈
雪の江の大船よりの小舟う那
川鳥森とさうるさし雪のく直
黄昏もるはうゆきのみままるる
ゆきの日やとれうひの都る
夜の雪落さぬみう小枝さく
川越さく水ぬ多ひ凄し雪の森
ゆきの雪独首にるさくまう

末山
女九
小春
二水
芳川
編子
卜高
卯七

又雪や名金のうちめ暖らふ
ゆきをすう宿なれらそありの侍
ゆりあつてあつたれもせし雪佛
朝の雪隣あつりはる所さうや
雪ふり小枝あつきうろ不二の山
日枝ひとつ前まふさる雪えんれ
六条の豆腐は沙汰も秋の雪
ゆきの日や先くさく先へ子とり
毎一葉あつりとおりり雪の上
そくされし雪はえんありのこと
峯くさく雪とのまらさくまらあり

一髪
惟然
一井
野坡
智月
乙加
吾仲
程已
土芳
野水
史邦

雪吹

長檜や徳田一相えん雪吹松
村雲此處吹少々や雪吹の根
雁鴨を波ふらち思ひあきまう家
下雪吹かりととこしきり馬の落
折とともあまりの至極の雪吹う船
あらう人も同一く雪吹の雀の那

其角
犬草
素覽
頭水
秋之坊
朝雙

霽

霽あも牙ハかまへとり 浦の雪
こもれ降る音や朝餉のてきるこ
りう仕立人朝水くみのひと霽
それなきの鈴ふり出はみそれうさ
初こもれ雪の園とふ小鴨うさ
みそれ降宿はとまうりや簑の夜着

其角
馬好
千川
正秀
蟬鹿
丈草

初時雨

旅くと我名呼まんと所しうさ
河系毛の鳥帽子の上や初時雨
新葉は玄根の雪やうさ志うれ
初志うれ野分お骨の肉うりの
居はくけいのるもさうさ初時雨
さうさうれ雪打海膳の時もさ
雷落し松と枯母はけら志うれ
芋食の腹るくじきり初しうれ
暮とゆく一羽鳥やうさうさ
米川登てまきや秋田の初時雨
うさうさ山の山をさうさ初志うれ
初しうれ眉中鳥帽子の雪うれ

芭蕉
去来
許六
西吟
浪化
言水
大草
荊い
諷竹
嵐作
希因
荖村

雨 耐

草まらうく犬もあつて牧歌の声
 客人やさうらふとくしと耐西
 宿者よ夜更の借やあつて
 釣杖は夕日をかきぬ瀬田の橋
 幾人あつたれかけぬ瀬田の橋
 松風の里をぬきとるあつて
 宵明とあつた夜くあつて
 食厨よりあつて合ふ村は耐西
 あつてはく雲あつてあつて
 渡り守とつて寝る耐西の那
 曼草あつたねとつて耐西
 鳥あつた鳥も山あつたあつて

芭蕉 宗因 末山 其角 犬草 嵐雪 許六 去未 秋風 傘下 楓竹 園友

冬四

松山やあつたの足はとくし
 葯蕪の湯氣あつてあつて
 牛馬の臭うもあつてあつて
 あつた縁あつて松風のあつて
 鰯焼くあつても伏見はあつて
 鋳鉄は下あつてあつて耐西
 喧嘩あつてあつてあつて
 食堂あつてあつてあつて
 板屋あつてあつてあつて
 小夜あつたあつたあつた
 家くあつたあつたあつた
 かつた舟の黒津あつたあつた

利合 猿 浪化 北枝 卧高 炊玉 車庸 支考 史邦 野坡 吞水 探志

霰

松苗沢のりりして帰る志らまの季
湖や志らまの下の星のかき
りまうひ小祓もなき市の対面裁
雑水も琵琶まき軒はあふれま
海へ降る休あふれや雲は浪は音
老武者と指やさなれんくぬあふれ
飛うつ山岩のあふれや窓のらち
あふれ浪とつれてこそしれ霰うき
冬瓜のかくてもあふれ降あふれ船
福とまの山田あふれ降あふれ船
星とまの山田あふれ降あふれ船

三岐 北玄 正秀 芭蕉 其角 去來 上草 重治 句空 正秀 望翠

氷柱

九合明けしとまきうれ霰の季
森深く時馬あふれあふれ船
あふれ帆小雲あふれ月夜うき
あふれ降あふれ奥店の船のりり
下まきり花とりのあふれ程うき
あふれかんと朝あふれあふれ船
盃や傘をさすとあふれあふれ
あふれあふれ長みうきあふれ氷柱うき
あふれあふれはらうきあふれ楓の青
あふれ折てあふれあふれあふれ
あふれ風の義あふれあふれ氷柱うき

知足 仲風 暮年 卧高 松翁 凡兆 宗因 鬼貫 一桃 夜舟 西鹿

霜

きれをこそと荒らねまゝの せねは菴
 平相朝はあふしやつむむ生 萎味 嗚
 一ツ葉やむとくくのそ 朝の霜
 初霜あ何とおふ 舟そ 舩中
 はつらもに 行や 北斗の星の前
 山鳥の尾よえかくとや 夜はしも
 親と子はあ夜をくらふ 野馬うま
 後の跡あむは 今朝の霜
 露とと露の水をねらう 旅の妻
 から道家や 藤さめはふと 母の露
 はつらもは 泣ふよとこれの 草はら
 里人のこころの 鉄橋のしも

芭蕉 嵐雪 支考 其角 百歳 曲翠 溪石 野坡 彫棠 路通 丈草 宗因

氷

若焼や 裾帷の田井は 氷
 舟あてて 氷や 氷の 藤さう那
 滝幅や 氷中乃いさり 雲
 我孝と 氷さう 氷さう
 紅麻子 結あや 氷さ 下さみ
 池の奥あは 氷さ 氷さ
 ゆく道は 音おり 氷さ 氷さ
 五音ひとら 氷のうら 氷さ
 枯芦ふ 氷氷の 氷さ
 刈株の 氷さ 氷さ
 氷さ 氷さ 氷さ 氷さ

芭蕉 秋風 其角 氷下 知足 孤白 音人 苔翠 芦角 除風 素子

凍

軒凍てどくや銀治る棍の如と
しとはけの凍つきかたのうそ無の風

思秋
秋之坊

冬

荷もなうて柳やかろきあはれ
下京や雪積う人の夜はあえ

亀世
凡兆

氷室

汗知して谷中突進む氷室うそ
海荒腸は囊埋めつき中室哉

冬松
利重

馬車

峠より雪車ひきおろすと塩木うそ
馬車よりそり引出ると目の有
伊序馬車や先まきくる及具持

荒弾
一井
不玉

神

無月

神を月ぬくく雀のまのあき
夜陽や流石ふさふさ小六月
つら家の佛とるとかみる月
神を月火とりと称宜のあはれ哉
十月やりのくへまはまみゆく
明暮は太根うま一神を月
菅抄る田面かどり神を月
元山や化をあふるとかみる月
神を月豆腐のまるあはれ
ひとあまの園もあはれ一神を月
宗任ふま仙のせよかみる月哉

其角
未山
鬼貫
任日
言水
幽也
治徳
氷花
素覧
秋風
朱袖
荻村

小春

去来

田もあらし息はく小春の那
 大木小小多啼目せ小春か菊
 瘦寂ふ苗根下くは小春の那
 小流老ふる宮子や小春はるの文
 花の木おむの森長の小春の那
 園栗と小春よ落る踏山一の那
 小春は風を帆も七合五夕う素
 海の音一日遠き小春の那
 霜月や日ませふあけくを森
 人聲も小春月と風のぬく山

野水 嘯風 衣吹 潘川 光彦 言水 蕪村 曉臺
 去来 甚由

師走

傍ひとりの師走の野る梅のくさ
 うつひさの落葉をよ森くる師走の那
 のの賣れ声きくくは森の那
 寒くはもなくと森くる師走の那
 燦の雪よまき分をくくは森の那
 煎茶に飯はふくく師走の那
 せん湯のゆさくけ清きまらるる那
 碓は森の月踏む師走の那
 師走の雪よ森も旅くるを森の那
 師走とも森くく狭は長さくな
 門初をまきく師走のあくひ那

去来 甚由 蕪村 曉臺 言水 光彦 潘川 衣吹 嘯風 野水
 去来 甚由 蕪村 曉臺 言水 光彦 潘川 衣吹 嘯風 野水
 去来 甚由 蕪村 曉臺 言水 光彦 潘川 衣吹 嘯風 野水

冬至

神送

神の
あそび

公おのち朝日冬至に郡
門前の小家も拝ふあそびか景
書紀典主故園も遊みあそび
荒るりのとあるふとに神送り
布子あそびとあそび神おと
雑水のあそびとあそび神ねくり
吹上あそびとあそび神送り
家くいの苗主居よるなり大母しろ
装束は鷹も倒さぬ神乃苗主
神の苗主とあそびとあそび神のあそび
駒犬や鷹もあそびとあそび神のあそび

貞室
熊野
甘藷村
鬼貫
去来
紅朝
赤川
其角
投風
鬼貫
荷翠

十夜

送
忌

十夜鉦鳴りは納豆もあそび
せめて十夜あそびと九十九夜
あそびと十夜あそびと十夜あそび
十月は十の代あそびと十夜のあそび
あそびとあそびとあそびと十夜あそび
祖父あそびの京あそびとあそびと十夜あそび
あそびとあそびとあそびと十夜あそび

達磨忌やあそびとあそびとあそび
あそびとあそびとあそびとあそび
あそびとあそびとあそびとあそび
あそびとあそびとあそびとあそび
あそびとあそびとあそびとあそび

言水
蝶羽
壽仙
波村
希因
乙由
蕪村
来山
史邦
梅葉
希因

命 漆

御 取 裁

桑簀頭切はくしりの御命漆
法令漆や願の青丸形比丘尼
おめい漆や帝衣の上は麻とらま
糸つらとや感をのせしと日蓮忌
法令講は珠敷ふまらる抄子外
おめいかう上戸も解法一庭へ有

ある鼻耳誠こそせ去り法を去り
おとりの裁まらるる松林坊
附西まらるる空や八百やのおま裁
玉阿ふまらるる百人前とおとりとし

芭蕉 詩六 奚魚 何之 木專 汶江

千那 史邦 紋村 養浩

蛭 子 講

曆 賣

御 火 燒

行かへし空の母なりとるる吟不講
夷講我料何しとくまらるるね新
大酒や三日はくしとるるいと講
蛭子講あひるも鴨ふ故よるる

あままらるるやまらるる月の曆らり
指くくやれらるるしき曆らるる
こよみまらるる月日手曆し下らるる

法火燒の盛物とらるるゆら鳥
御火焼や賑治る傳へし古るる
法火焼や霜らるるし京の町

去末 曲翠 昨了 利合

來山 孤屋 京師

智月 桃隣 芝村

あはこ
系

神樂

里
神樂

吹草まゝの月代まきあるしうね
 客人に吹草系糸の小繫をけ
 口焼やぬいとまろりの酒おかん
 おりもろもろてあしむ神楽うね
 ろろろねや神樂拍子あまかろろ声
 さう御か五の機嫌やいせ神樂
 たりし強き神樂乙女の化粧うね
 乙女子お火神を廻は神樂うね
 ことろろねらそ貴うね里神樂
 のろい氣やま里おはろろ里うね
 結算馬お夜も州まろり里神樂

定推 史邦 竹戸 北枝 浩通 宗因 望一 龜翁 之道 龜翁 和尹

鉢
扣

長唄のそろもろろはの鉢うね
 ことろろく舞うめおしらー鉢うね
 物くるく門あもろくと鉢うね
 ろろ門は竹ふまろくやろろ扣き
 狼のひくろと喰る色ー鉢うね
 朔日の控あられ形りはちたき
 世お申ハ足より響ー鉢うね
 ろろ声の唄まもろろとろろ扣
 鉢うねき浮名忘れそ鉢うね
 牙あそろろよ下結ろろ雨の鉢扣
 食射やろろろと下ろろ鉢うね
 世の中とろろと鉢うねたき

芭蕉 其角 文草 野童 柴栗 尚白 乙加 之道 水花 路草 穀子

芭蕉忌

瓢箪の内も空也と辨しき
ちりきき古らもまは空也より
弥多傳らたれと良や詩たを

負徳
鬼貫
蟻道

佛名

聲高し佛よぬなり霜の星
仏名や鐘頭の香けりと煙り

末山
酒堂

大師講

大師講くか門前を巻休み
うきうき講徳を焚や大師講

楊花
可自

空念仏

酒飯の飲酒はしるも寒く念仏
傾城もいづく麻ふれぬま念仏
ま念仏をえれ出入の大工か
空を編う川場を庵も水はらん
かんと念仏をすも傳る法りなし

其角
炙魚
大町
康示
水山

木葉

人行や木の葉かき寄る風の道
藤より足さつりよき木葉ふり
あちけりぬ木の葉にあらる常哉
禪の売つてて葉ゆき木葉ふり那
あられもつるみて落る木葉ふり
炭屑ふりやあつる木葉かな

素堂
松風
風有
為有
四睡
其角

冬
木
五

こくくくくや伸くうりきく山のまされ
木枯くし剣をぬくふとらみ山
風のあうり西やくぬやなき
あうくくくや教のく動く嘘のき
風ゆかしまくくくぬやうきく
木枯やうくくくくは枇杷の海
貝うりを風の吹くらんき木ま
象の目さあーときくく木ま
き木まうくくくくくくくく
かゆくくくくくくくくくく
芥くくく香ゆ驚くくくく木ま

其角
去来
本草
西邑
業言
牧童
郡棠
車庸
其角
奥口
蕪村

枯
柳

霞
お
紫

帰
家

川越く赤き足ゆく枯やなま
柳まゆくくくくく昔の盃清く
くくくくくくくくくく柳の
色落く紅葉を散くくく風の声
付西くくくくくく紅葉のちる日
詩や歌やゆくくくくくく
こくくくくくくくくくくく
鳥虫のくくくくくくくく
山茶花のくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

鬼貫
其角
七の
負室
樗良
風状
芭蕉
昌碧
車庸
素秋

枇杷花

竹の木と同ふまてもなす一ほり花
物凄やあふおりの夜や久りも
至りの木の胡よ美かかくり花
鴨のとさふさふさむーくくさふ
流草のさくさく白ーのりさふ
皆人の白ひをりやー枇杷のそま
窓流く後らう音やひしれらね
賢女あふら枇杷花のやうやあふ
志るれーとあめてさくや枇杷の花
琵琶くと松風さくや枇杷花を
枇杷の花ももさふさふと日暮る

未山 鬼貫 樗雲 秀和
鬼貫 舎羅 一野 二川 基村

山茶花

山茶花小葉さくさくも花あめ
さくさくや蝶のさくさくもさくさく
山茶花やさくさくさくさくと庭の雪

治徳 李東 幾葉

八ツ手

雷の撥けらさくや八ツ手
くくさくさくさくさくさくさく

百里 林蔭

冬梅

草木ふくさくさくさくさく
日射斗のくさくさくさくさく梅

鷺水 汶上

冬桂

うめさくさく交体中やさくさくさく
さくさくさくさく入さくさく浪ふさく
火とめさくさく日さくさくさくさく桂

鬼貫 言水 笑

冬
梅

ゆりゆりと春くる在りや冬の梅
一と梅も二と梅も十梅も冬は梅
雪霜の骨となりてや梅の心船
鎌倉の傍こそとらるん冬の心船
肉養の吉酒を移るや玉れ梅
生言れ手はききもきき一冬の梅
冬の心船をきのふらるね石の上

惟然
扶搖
支考
露沾
其角
希因
荖村

冬
牡丹

あつらふ花あよりかこそ牡丹
大船も救ある家やあゆほきん
ひらりと空け風のききもきん
薄上は土の黒さよふゆほきん

維舟
西武
鬼貫
杜旭

冬
水仙

水仙や川をりつぎく江の月夜
小坊主の上下あつらふ水仙
冬水仙の心北さるさの日うけ
まぼけの日教をそくや水せんを
水仙は北をりくへのかうみのおと
煉世直の中よりあつらふ水仙
まのせんのはつれかつ終や朝嵐
おく霜の敵を味うこよ水仙を

支考
尚白
智月
素牛
尚白
露川
斜嶺
乙州

冬
桔尾

手あふ後の仮家引けり桔尾花
中くふ根はよくあつらふ桔尾花

蕪村
曉臺

茶 花

茶の花や 蘇何みゆる流き
ちやのそふふ山成焼家とふふ
茶のそふふや 老と二ままをくれ
茶花をふふ 登眉をふふを詠う那
ちやのそふふや 登眉の子は泣きふ
茶花をふふや 徑をふふける星月夜
ちやのそふふ物 序ふふふるう

野坡 巴風 彫棠 柴棠 浪花 龜世 李晨

寒 菊

寒菊や ちやのそふふとかな
かんきくや 際うふ滴一軒のほま
まきくは 咲くなくふるふとて
らん菊や ぬふ四五ふん雪の跡

上芳 諷竹 卓袋 野坡

石 落

空明の姿ふふとや 石落のそふ
手水鉢あふひ流しけりれ花
下莉の敷き 藤ふりふ落の花
井戸神の結ふふりけりはそふ
咲くくもふふてぬる石落の花

言水 俗者知 養浩 種文 蕪村

冬 枯

冬うれの木は 回ぬらん 賣るしき
ふゆ枯や ぬを 目南ふ 滝えり
冬かれふ 風のそふふもなれ我
ゆふうふ 馬もあふふ 亦打ふ
冬うれや ちやのそふふけり木
ふゆうふや 野ふふまのの 餅たおと

去来 龜翁 洞雪 新志 文丸 芦雄

枯 芦

枯芦や新波入江のまきらみ
かれぬや野の櫓をちと捨小舟
青きく川辺の芦れ枯ふくま

鬼貫
蘭水
曉臺

草 一

志のふえ人枯く錦つふ舎りうの
菊うもや冬くく薪の位とと後
葛のれて壁を登くは菴う系
枯芝ふまこ残りくる志のふく那
小坊主も旅人ふれや枯くま

芭蕉
杉風
琴風
已百
配力

冬 野

捨人やめくくまらふ冬野ゆく
手もあまを物荷ひり冬野ゆ

来山
其角

枯 野

岩松の梳荷こそむる枯野ゆく
月日をもうくはとるりゆか
大腰ふかく一投出とくれ野う那
押子や枯野ふ常乃まきとくこ
まらうりとかはやのれ舟のあや石
かましはのゆねよ折込枯野う系
我ま母そくくまの舟まきとくこ
松苗も枯野ふ目く山嵐の柳
夜も居くまらまはのる枯野うれ
塚とく枯のり多れ野中うろ
川筋の遠くも曲れかれ野うの
白根へと雲ふれ行枯野う南

治徳
智月
琴風
閑月
玄梅
呂丸
不角
拍風
土芳
私賤
岩翁
秋之坊

足るう格ハのころて格此のまふ
まふ道あふりまふかれ世うま

乙由
荜村

旧日に山三井寺の大根幼き

詩六

今様もあふぬ淋し大根曳

風園

系物おほく人ともるうや大根引

李由

鉢巻をとまると帯流そ大根引

野坡

大根

曳

玄實の世おころさぬう下菜煮

其角

うもろて菜と下枯と塩をうぬ

真兒

ひとりのや一字の題のこまは草

百花

葱のまろく人枯卧古菜一のま

蕪村

下菜

葱

麥

麦前や妹う湯とま川類うふり
あまきよふや明まもある日に青月秋
ちの霜や麦前土のうらうおひて
麦とまろく人あまそ赤うし
あまこの麦ま死のこまを彦彦

鬼貫
之笑
北枝
秀泉
佑徳

鷓鴣

親父と人起きあまきふのそさうい
鷓鴣焼火小迹係朝戸う系
木ううや窓よ吹返心まさうい
晩うこの声や壁係みとさうい
こまさうの家あまきううまうれ
まうれ雪ひ

乙州
佑徳
葉芳
惟然
如行
祐甫

千鳥

けし崎の園をころよとや啼ふ鳥
 昼の内鳴も稀あり千鳥う那
 公成や釜小ゆらゆら浦ふとり
 かた鹿の馬ふんてゆい街うれ
 野の炭を啼やそあふるふも哉
 うらもゆぬ凝冷う火清し小狹街
 冬の日を丸小ねてやまぐふも
 家お教江入とまや啼ふとり
 葬の火をまふり小奇や淡ふ鳥
 松をまねてけて走るや村ふとり
 朝鮮をまふもあまふ友千鳥
 船は焚火の声まねるふもうれ

芭蕉 素堂 其角 傘下 桃先 泥足 洒堂 野坡 李由 素仲 村俊 亀洞

鴛鴦

せのうてりとは江やふとりゆ
 志き浪小浮桶かつるちとりふ
 ちとくや風の吹まるゆふ鳥
 波を引牛のこまゆ村ちとり
 障知し玉あよりやゆふとり
 室君とまふもあまふ小狹街
 小夜ちとり庚申待は舟を取
 をしのみきて物まらなる小池哉
 多とゆねやふあふ鴛鴦のあかみ
 鴛鴦の女は世をあまうりなる姿れ
 をしとりの坊やめとくと清氷

貞徳 冬栢 迷亭 苔浅 治洲 台志 大草 尚白 山川 蕉下 文里

暖鳥

荒一重のやと食のぬくぬき
時寒や売引うもぬくぬき
暖るあしうふうぬくぬき
ぬくぬきとゆふからうぬくぬき

其角 許六 尚必 素砂

鷹

鷹の如く所見はけと驚くこと
あつ目の目樹より出は光う有
視かまを物うき鷹の夜居う有
雪のそる程さうやけしや鷹の声
木かきしよ吹さくれり鷹の中
鈴ふるふ鷹に晴るる尾上うな
くれるおの鷹は太緒やたぬあふれ

芭蕉 芥英 桂夕 李由 冬市 胡市

鷹

持

ありのかて殿の威をえる鷹時うぬ
街寒野おさうんてわう細代さ
鷹の跡よひきさうは燕う有
うり匠の鼻のあまればまきさう有
鷹それせあまし月とある夜代

亀翁 李由 蕉笠 乙由 曉臺

夜

曳真

大曳て豆鷹持ゆり里夜真
我多小月夜うさうか鷹うぬ
我真曳や大のとうる堀のうら

其角 工齋 荻村

木兔

木の向かへ木兔こえぬ山崎我
木兔の眠るととをさうとさう

子英 半残

冬
の
籠

綿帽子の鞠をちりちりや冬の籠
百年の後なき人やあのお籠

許六
肅山

穴
熊

丹波崎や穴熊打も悪右衛門
穴熊の森首うらもまふかぬ
くら巻や穴熊打の九寸五分

嵐竹
山店
史邦

鯨
突

おそろしき鯨はつきとぬき青の月
逐はめる所もなうてくーら突

猿
進守

罨

ぬーはけや魚と火宅の二ツうね
罨や夕日ふのそく魚のうけ
ふー漬や芦浦領の濱年貢

和及
如空
史邦

綱
代
守

あーあの中む度あまうーあー守
世所擗りかけてやう治の綱代も
猿丸の山うけのそあー海も
綱代木のゆらみかある氷々南
のう風やあからうみてあーら
川はふや声吹流をあーあり
夜の雨仕合いうあー海も
ふを流ねて扱の綱代巾養狭し
綱代守う治のかる昇とありまうり
あーあまうーあーあから擗火打
綱代守大根ねまをうらめまうり

其角
素終
正義
不角
何之
其延
鞭己
心水
許六
乙由
其角

生

流

流流多ふみわりのかききよや独伝
打浪の身をまうせうはるまよころぬ
みろじと生海流を焼やどのの事
薬藉の角わりのじと生流流う系
ひく改しはれてとろしきるまこころぬ
汲汲ふまろひ入るき生海流う角
流りの流の海へくうけてままころる

嵐雪 車傭 俊似 左次 莫陵 利雪 希因

飴

行そしてえ五湖茶飴のまみ使
茶坊と軒の松風うらうらかなり
う川もや坊北吸りの陸うらまき

素堂 曉臺 十洲

河豚

遊ひきぬあく路う絶て七里よて
河豚あふあふのあうりや下川系
盗人ふあひしともらうんあくの銭
ちれそこそいそく橋あめてうけれ鯉
鯉くおし川のあよかたの河豚汁
鯉の子や魚をふくねくうま行
今まうらふ路うねて味うあくお声
喰うあてや死ぬうとあひの河豚汁

芭蕉 其角 去来 牧童 如泉 八橋 氷花 芥卜

鯉

鯉鯉をふりまけまを対うれ
ゆんかうや小あうまれとも二人前

其角 史興

鱒

鱒のはら度一交箱の入り目
は一まや次身ふむの丹波鱒

来山
楓子

乾

鮭

をうじの乾鮭買つて安いの
からまひとゆりくゆりやめが
なち抑乾鮭うりをとくとえちり

鬼貫
雪也
馬莧

薬

喰

あゆいと一身をあうらねく薬
禪傍や悟つこえ人のなちり喰
客人ふ見物さうせくくまをこひ
なちり喰罪科もなちりあう新
ちのくくと五徳とえけり薬喰

来山
芦本
史邦
葦村

せ
住

葱しりく洗ひまう係をまう那
火のけ虫脊戸くくをく一竈のあ
正客の行儀くくまねまうはくま
なちりふま賀のま居の寒ま我
膝ふ一紙はくめと出はまははの
夜まほの脾胃のはらまや寒ま代り
雪あふれおはらるままのま
若葉ま切お吸まのまなれまをま我
さうまき日をまあままむの烟料切
当市木にまおの藤はのまあまう
はらまのの水あひと居る馬う那
まらまらに沖の雲くまる寒ま我

芭蕉
去来
野坡
尚白
隆車
千川
夕菊
利牛
千那
游力
魯中
捨石

小屏風ふ葉を引かへ顔毛をさうぬ
植竹二川うせささあし道の端
あうあうは院の白の毛は一の有
膏自のあうくと思ふさうあさうぬ
まあけまへ袖ふれを麻紗の程を
まうた夜を裾ふ鞍壺く旅添うる
おとし刷毛ふ葉縁の竹は毛をけ
晨明の雲ふあみはくさあはうぬ
桐の葉ふあみくさあし内をけ
生壁ふよりけきかた寒さうあ
毛は毛をまもなうけしはさあさ我
あうううああああああああ

斜嶺
土芳
九節
卧高
支考
左次
彼村
魯可
野明
李由
柳玉
鬼貫

頭
巾

足
袋

目くうりときまうう敷巾の侍世う系
山里や頭巾とる人き人も那し
かられ家や片耳うけて角はまん
節季のふあうてなう人き巾うぬ
梳針坊羽けくおくはまんこの有
結膏の尻巾や耳を明け居る
あうああもそのああ通も尻巾うぬ
古足袋や身あとの宿はきぬ配
揚き配やなひうてあうをを靴持
あうああ足袋やの身子のあうをを我

具角
観水
専吟
堂芝
之通
鬼貫
朱紬
素堂
末山
毛紈

冬籠

鶏のたわしはくやふゆふゆり
 捨すや木骨の塚のふくこもを
 冬このりのいきりてふゆふゆり
 下帯の竿にかけはくふゆふゆり
 そこのゆや度同のふゆふゆり
 ふゆふゆりの眼のふゆふゆり
 汁端の跡しんくやふゆふゆり
 松風やゆふゆりゆふゆり
 沖の櫓もふゆふゆり
 鳥れ羽のふゆふゆり
 大儀して鴻蓋をゆふゆり
 人代吐く息をふゆふゆり

丈草 許六 彫棠 木節 怨風 朱紬 園友 荊江 沙明 配刀 李由 千那

合表

土漉子や燈火ふなぐく冬このりの
 先柱をばくふゆふゆり
 後くふゆふゆり天下の合表ゆ那
 絡くつてゆふゆり
 皆てくつて夜の合表もゆふゆり
 はまこふゆふゆり
 嵐退くゆふゆり
 めつ合表夏の酒ふゆふゆり
 蚊うまゆふゆり
 麻かゆふゆり
 沙汰律師とゆふゆり

本岳 八峯 嵐雪 松風 丈草 尚白 蕪下 千那 惟然 不堂 蕪村

蒲
園

蒲園をたて流るるもくろや東山
我ふらんいづく旅のまろころ系
古今ふひと夜のふける奴らんうね

嵐雪
佑圃
蕪村

紙
子

ちぬ枿の木の家家の暖や糸菓子
紙子長てうれし火燧の走り炭
南天よさらる音と糸紙子う南
ささかしくなるとねとりえや古紙子
人中の我まうこ恥のかこ子う系
寝るうのをまきけ隣も紙子うぬ
ぬ住居や後夜の紙子の已形

宗因
火草
木守
正秀
湖春
二暮
景帘

火
燧

はしりくとのりのけりまる巨燧うぬ
ま夜中や火燧際よと月のかけ
下衣をぬりてこころ行脚うまふ
はとあよと寝もあさるぬ巨燧うま
寝るや巨燧燧とんのまめぬうち
嘶して火燧小森入は童の系
灯のうけ小敷とくひとるあさりうま
森とろろのひとち小遠ま巨燧うる
宿うてまろちち自まきこころの形
ゆ亭主のふ別まわる巨燧う系
寝物おまよりゆるまとあさるの角
おしふてこころのあさるの角も旅

鬼貫
左末
大草
嵐雪
甚角
岩翁
奥兒
松翁
我家
氷花
龜翁
之道

埋火

小石を火にまき入るる巨魁なる
 見其基は髪結らちのさくしつら船
 自由さや自由と追ひし音さつ川
 ののちりひ火燈をのけていりあふん
 埋火やあふぬいのちよ息かけん
 うはさ火の南をまきけやまきりくは
 埋火の根端とみいさむ夜明う有
 うらさ火やあふねて煙々粒ひとり
 うらみひや雪をうらちより
 埋火やあふぬる老るる鶴のそ

李由
 毛純
 洞木
 舟泉
 来山
 其角
 波村
 風媛
 宗瑞
 蕪村

火桶

霜のむらけ子さけ火桶々素
 さあふそと暗れ火おけのあさくさ
 朝をねを火桶よのこをきけう林
 老あふぬ今朝しもあふる相火おけ

芭蕉
 澁竹
 瀧山
 香言

火鉢

黒塚やはちや女のとく火をち
 うらさより圓居て又えぬ火鉢火
 のまおとら断高且く火をちう船

言水
 岸口
 順水

湯婆

湯婆うら駒の出さるる手つたれ
 あんはうら羽ささかたれ暖き

凉菘
 雨音

冬 搥

冬 子 餅

冬 宗 因

山畑や昔みのこしてをかすへ
 をかす人藪小椿の多いしら
 止里の笛主うとんえて冬搥
 妹う手に鉄搥やさしをかす人
 唐船の通ひハ多えくふち搥
 炉開きの日沢あめ一社の土菜うね
 うひひんや鼻をさくして雨を笑
 游動くまや海沢よふら令のふ
 あふ葉のよるけちきりや亥子餅
 三日月のをらふきわとよ亥子うね
 子にのみてせらう一社三ツのぬの子我

去来 珍碩 和及 凉侏 嵐雪 子葉 其角 宗因 其角 青丈

口 切

納 豆

子 始

口切の葉や常盤木の若みとま
 うちよりのや講所煎をきかいら
 はまりのやのしもの裏のふ夏之さ
 はまりのやのしもの裏のふ夏之さ
 くら切や小城下まうまうなうね
 納豆とるとまねや炭の雪お経一
 碓はまて又の藤さや納豆一糸
 殺の子はかきもるえり車始
 師き氣お一日ぬけぬふと一矢
 ちとはしめ又や赫くら折うら

三圃 止秀 西堂 求花 其村 太草 其角 立圃 臨通 尚白

髮置

髮置やわさし月日ふ三輪組
かみおきや守ふく後の巻じとひ

和及
重厚

袴著

袴着を娘の子おもころはうぬ
のみなえよまこけりまきや足先

其角
六亀

爐

爐の眠り浪とこまろ紙須戸明石
ろの隅ふ身を耐の神とらうれん
淋しはやわろりの足のとくも居を
炉をめくは命はれる一摺の熾
ろの友や頼ふかまろは翁面

言水
秋之坊
山峰
似方
日下

摺

ちつろや摺よふまはる煙草
篠木や風雅をくまろ摺の言
面白の旅馬や摺を夜息ふとく
春ちろく摺はくまろる葉畑我
お尻ろをこの終中まで一夜の摺
雉子鬼はるしつろる摺明王

鬼貫
玄三
巴丈
龜翁
秀宿
曉臺

炭竈

炭竈や煙をぬけの猿の声
よみうはとあつて経よむ法師は
炭うはのけろりの松や雲の浪
よみ竈の口あきくからる煙ふり
炭うまやけ身をかむは風のあき

其角
下炊
之道
龜洞
子珊

炭

炭賣

冬をかまへ一ふ俵やとみこみつら
炭焼や臙の清氷鼻をえん
さみみの火よ並ふあま入りの光こま
小野とらふ名ふれされより炭俵
片眼のそねしや炭のりゆらよて
雪う今朝炭のおとらねその肉の
炭をさしむ音さく氷る森耳く船
炭賣や隣け人う焚火おひく
まをみらりも面うまうれ炭を系
すみ賣や宿ふひとりのかみと

宗因 冬角 北枝 和賤 沾徳 詞山 嵐蘭 大草 温故 心流

冬の月

霄の帆を雨うもえんあゆの月
雪よりのもさう白髪よ冬乃月
肝煎火吐まをるれりあゆの月
襟もたよ首引入まをるれりあゆの月
喰めのや門賣あらくあゆのつれ
かこころもいさむ簀のたやあゆの月
たし舟のぬまきしやあゆの月
奥店や越うらあまうてあゆの月
堀裏の桐の木さうらやあゆの月
足りともあふけてまをるれりあゆの月
狼のかりま高まりあゆの月

其角 大草 温故 心流 嵐蘭 詞山 沾徳 和賤 北枝 冬角 宗因 素覧 里東 朱細 我眉 奚奥

冬三十一

寒月

志はくくと寒みを月の光の自
あよりも氷の月をうらみたり
を月や門なき寺の天高一
寒月や四条の橋も我ひより

土芳
鬼貫
蕪村
蝶夢

寒夕

寒声や手拍子の流川向ひ
かんとあふ行くぬ橋さく河漕ぎ
寒声のゆめを多ふ川を
旅人は寒声ゆや瀬田の橋
寒あふやあふぬ別を隣より
かんとあふや山伏村の長はくみ
うむあふ古余風は流るそ

牧童
行露
知春
桃奴
暮子
仙杖
蕪村

寒入

厂のひやあよれくまてく寒のハ
鐘の声いと一はまふふ夜うね

風幽
作者
ふ知

寒垢離

寒垢離や上の町までありたり
かんあふよおのれ本間のをんみ方

暮村
峯及

臘八

臘八は愚癡を一下曰あふけとや
あ真き粥とくろりや我う腹
臘八や八瀬の暮も山をゆれ
臘八や宵はあふりのほひこひ

諷竹
尚白
乙由
既白

臘

あうまの膏菜はくむ為菜式
臘を以てえふはくや前下や

木導
惟然

霜

霜中けの身をふりてはは空丸け
梅をとりては花も葉もさき

羽紅
山川

冬日

生簾小梅もふ冬の日向のふ
冬の日のあけは移るみのを好し哉

沾徳
言耻

冬夜

冬の夜やハハ半射る体火の声
ゆめは夜目のひ方や奥戸柳

勤也
珍碩

風呂

吹

日卒の吹るふきとしく比叡山
風呂吹やその夜は夢の春ん城
千手井をあら好きふ汲よしも哉
霍の毛や風呂ふきよらる窓のけ

其角
琴風
千寂
闇指

節

季

候

箭季ぬのふれは風雅も師をうら
箭季ふらな左りの耳小鳴川のふ
せのきのやせうき口のあをひ色の
節季ふに白くも糸をうねるあり
目ふかづれるゆもをみまやせ川まぬ
節季ふもををとこふの従々那
せりきひや抱えて通体園の前
おとろけや念佛を危生せ川まぬ
箭季ふやまの天王寺街墓山
箭季ふや打揃ひゆく橋の上
せんきふの拍子をぬくと明をうね
節季ふを酒のむ射と後ふらり

芭蕉
其角
路通
田平
一洞
毛純
露川
宗因
トク
紫雲
挑後
乙由

燧 掃

燧くまの己の棚掃る大工の那
 畑中のよりの静やとくともひ
 とく掃戸山風うけと吹き通し
 のつ方へゆきとあそりんさくくらひ
 燧掃くゆから足らぬ家の内
 家くや形のゆきとくはひひ
 すくまきの若葉ふかくゆ、数寄や我
 夜の火や不破の園玉のさく掃ひ
 燧とまきーかから風はくむ湊のみ
 賑わーさくと家家の朝まき
 掃くえふらう後あつせやとく掃
 民の家もよとあつとさりの燧掃

芭蕉
 嵐雪
 大草
 拳白
 月下
 祐甫
 史邦
 如行
 黄逸
 知足
 百里
 守因

餅 搗

衣 配

弱法師我門ゆはせとちのれ
 餅搗やありの少掃る鶏のとや
 一とせや餅はく白のこととまき
 膝かーら出て餅のまきはら那
 のちつきふ小腰まきり瘰癧中み
 餅はまきや白も薪ゆ松くはー
 とち搗の手はひとちや小山伏

其角
 嵐紫
 万子
 東推
 史邦
 之道
 馬佛

燭のちも後をさくさくや衣くまを
 とちらの手ををさくさく出の衣配り
 まぬくまのりらとちぬ敷の九日ころ
 師走さく一条夜のまぬくまに

野坡
 木守
 望翠
 野徑

市ち

年の市終をよぬらん時織との
長寄ふ唐物もな一室一の市
そのの市と月一き業やをけり愛
彼一場人引と事味と一乃市
我教もろねの片荷や年社市

其角
氷花
トト
実奥
麥林

節分

打まめも戸のあるかこの響き
おそれや服ふら河内鬼の面
年をとる鬼は後人や焚ぬ豆
くら後さくまやらつとよ人厄拂
聖よあもあめりけむ厄もい

重頼
太祇
荷兮
其角
亀翁

厄拂

橋はし

下間くひくらきさせり居ら
橋や二十七夜のう川は軒
日のかり小塩あく軒の鱈の那

巴山
左圍
桃隣

年忘

奥のこの後なまをきと年忘れ
引燈を消せぬ嵐の雪一り
あつとれあつとれを敷はうてか
そは切のまう一はやと一り

芭蕉
大草
如柳
宗因

行ぎ

行と一の空社際さ人らそかき
ゆく年やま賀造営の祈詔人
引中くや伊勢北伊燈の糊細工
ゆく年や木の葉交りのくうけ炭

鬼貫
詩六
琴風
沙明

年の瀬

とりの瀬や漕を揖せとり行ふ
年終の瀬やひらふ春を指す物さひ

木山
其角

流るる年

あの高れらるる年、年の淀みらん
なうね、やみ手陀羅尼の年の垢

素堂
其角

ま真結

とりの火の結ふまき川庵う那
まきまうやことに女の髪の出ま
雪まらぬ春まのりあ結使の南

鬼貫
風烟
ろく

岡見

岡見とと妹はくらひぬと人の門
日のかえりまう六目のり思ふ那

嵐雪
言水

年籠

月もなき枝のあふりやと一籠
年籠りの籠れ中の中居りまうり

召波
曉臺

大晦日

揉ふりむふ舞妓の涙や大晦日
ゆきりの夜は鯉やゆきりや云の悟
あさ一人ふまうとあふ年の一日う船
助番や二十九日の大みそら
とりの物もかきうた涙をとやなりぬ
年終夜も夏走らうとを儀のな
一とまきり啼とるけし除夜の音
山伏や出まそらうる除夜のやみ

末山
去来
仙化
孟竹
猿羽
利合
正秀

景の昏

月雪とのきさりの暮
 股引や膝うふせきく
 木綿買門の度改や
 同かへをうねりも
 見りきてはては
 野蔭をまうし
 出女も出うそ
 せりるふも親の
 少一のきとや
 天地は益人
 此くれもま
 采虫の石白

芭蕉 千那 馬佛 曲翠 楚水 牧童 許六 思演 廬水 曲水 枚風 鐵下

年内 春立

舟の垢と
 年寄も
 お奉行の
 くまてゆく
 猿候の
 小傾城
 立年の
 日も八日
 去年ふ
 冬は
 うら

托風 東順 来山 去来 嵐雪 其角 負室 来山 鬼貫 智月 乙由

唐本和宋佛書石刻以經類
諸家以花板書抄部

京都市淺草區北東仲町五番地

書林 淺倉屋 吉田久兵衛

